

NHK アカデミア 第24回 <ホラー漫画家 伊藤潤二>



伊藤潤二：ホラー漫画家。漫画界のアカデミー賞「アイズナー賞」を4度受賞。世界中の読者を魅了する。

こんばんは、ホラー漫画家の伊藤潤二です。私はこれまで、さまざまなホラー漫画を描いてきました。あちらに並んでいるのが、その作品の一部です(下画像)。こうして見ると、結構な作品数があると思います。



今日は私の作品を通じながら、“ホラー漫画”というジャンルの面白さや、私がなぜホラーに魅入(みい)られた

のかをお伝えできたらいいなと思います。そして今日は、なんと中川翔子さんが進行を助けてくれるということです。



進行 中川翔子さん「進行・インタビュアー役の中川翔子です。私は伊藤潤二先生の大ファンで、今回、作品の裏話や伊藤先生ご自身について直接深掘りできてしまうという貴重な機会で、本当に今日を楽しみに生きてまいりました。よろしくお願いいたします」

<参加者が質問！私の好きな伊藤作品が生まれるまで>

進行 中川さん「早速ですが、前半は伊藤先生のストーリーについて迫っていこうと思います。伊藤先生のストーリーの特徴の一つに、『想像もつかないような奇怪なアイデア』が挙げられると思います。今回は、アイデアの源を聞いてみたい作品について、視聴者の方が伊藤先生に直接質問して、先生に解説していただきます」

私の好きな伊藤作品が生まれるまで

NHKACADEMIA

グリセリド



ゆうかさん「私は『グリセリド』という作品が、いちばん好きです。『グリセリド』をつくるきっかけは何ですか？」

伊藤さん「『グリセリド』というのは、“油”を飲むお兄さんがいて、“油”を飲みすぎてニキビがいっぱいできるんです。彼は焼肉屋さんの息子で、妹がいるんです。妹をいじめるときに、そのニキビの“脂”を絞るという、そんなような話です。この“脂”の気持ち悪さをちょっと表現したくて・・・」



伊藤さん「私は高校を卒業してから、歯科技工士を目指して歯科技工士学校に入ったんですけども、その専

門学校の仏教研修という研修で、お寺に泊まって修行するという授業があったんです。たしか三重県の方のお寺だったと思うんですけども、そちらにクラスで行って、掃除したり、木魚をたたいたりしたんです。夏場で、夜中に寝るときの布団が脂でベトベトのものが出されて、その布団で一夜を過ごしたのが非常に気持ち悪くて、印象に残ったというのがきっかけです。

思春期の頃、私もニキビがたくさんできて、自分でニキビを絞った経験がありますので、それをリアルに漫画にすると気持ち悪いかと思って、読者の方には大変申し訳なかったんですけど、その気持ち悪さを表現したかったということです」



伊藤さん「お兄さんが顔中にニキビがあって、それを絞るんですけども、その絞った瞬間の絵が、われながら非常に気持ち悪く描けたなという手応えがありました」

ゆうかさん「私は受験生で、同じニキビで悩んでいます。『グリセリド』を見てから、ニキビを自分で潰して動画を撮ったりして...だから、いちばん大好きな作品です」

進行 中川さん「衝撃ですね。受験生の若い世代のかわいい女子が『グリセリド』に共感するという。すごい未来が来ました」

私の好きな伊藤作品が生まれるまで

NHKACADEMIA

首吊り気球



ゆみ

兵庫

ゆみさん「私がいちばん好きなのは『首吊り気球』です。衝撃的かつ非現実的な絵がすごく印象に残っていて、ストーリーもすごくダークな感じで、夢に見るまで好きです。『首吊り気球』がどういうふうになられたのか、経緯といいますか、そういうお話はありますか？」

伊藤さん「『首吊り気球』という作品は、ある日、空から気球が飛んでくるんですけど、その大きな気球が実は自分と同じ顔をしていて、下にロープが垂れているんです。そのロープに“首吊りの輪っか”が付いていて…自分そっくりの気球が自分だけを追いかけて、首をつろうとするという話です」



伊藤さん「最初にイメージとして浮かんだのが、大きなアドバルーンの下に、首をつった死体がぶら下がっていて、それが空を漂っているというイメージです。そのイメージをストーリーにはどうしたらいいかなと考えて、首をつったアドバルーンが町の上空を通過するときに、その下の町で何か奇怪な事件が起こる、一種の不吉なシンボルとして『首吊り気球』というのを考えていたんです。でも、それだと下でどういう事件が起きるのかというのが全然思いつかなくて、ああでもないこうでもないと考えているうちに、気球そのものが下にいる人の首をつりに襲ってくるというアクティブな展開にすると面白いなと思ったんです」



伊藤さん「最初は、人の顔という設定は考えていなくて、普通の丸いアドバルーンが飛んでくるというふうに考えていたんですけど、まだ何か足りないなとちょっと考えあぐねて・・・お風呂に入って、どうしたらいいんだらうと頭を洗っていたら、『自分の顔をしている気球が自分を襲ってくる』という設定にしたら面白いかもと思って、そこでストーリーが一気に出来上がった。そんな経緯です」

私の好きな伊藤作品が生まれるまで

NHKACADEMIA

双一の誕生日



ジェイ

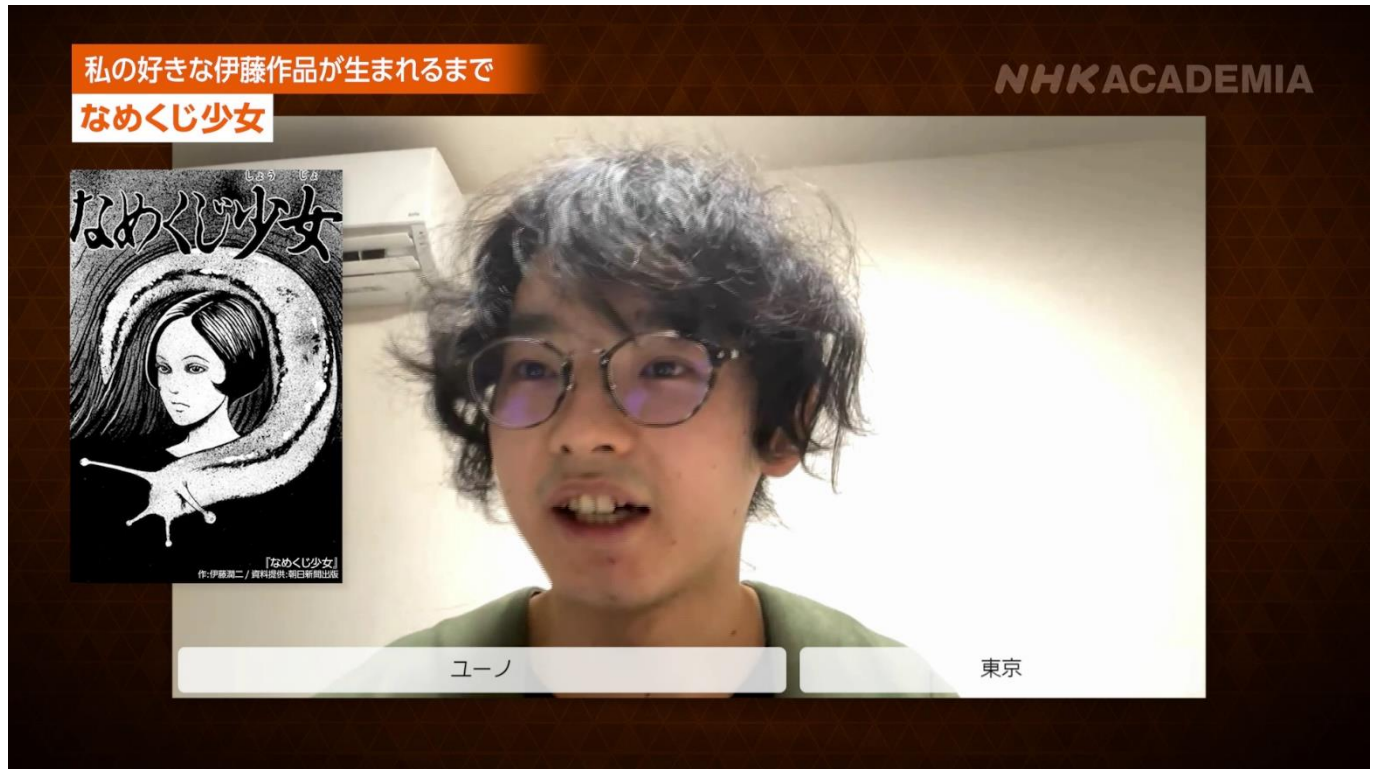
埼玉

ジェイさん「双一シリーズがあると思うんですけど、双一のおばあちゃんのエピソードがあって、ずっと忘れられません。何かうそをつく、当たらない予想ばかりする人というのが、身の回りにもいるような気がして…あの人のモデルがいたのか、教えてもらいたいなと思っております」

伊藤さん「双一は田舎に住んでいる少年なんですけれど、非常にひねくれていて、いつも釘(くぎ)をしゃぶっていて、たまに釘(くぎ)を飛ばしたりする、邪悪な少年というキャラクターなんです。その田舎に住んでいる少年の家族や親戚も加わって、ストーリーが展開するというものです」



伊藤さん「不思議なことに、少年の家族、他の家族はみんな“普通の人”という設定にして、その少年だけがひねくれているという設定にしました。のちのちシリーズ化するにあたって、『なぜ双一がひねくれているのか』ということの説明する必要があるなと思いついて、その原因がおばあちゃんだったという設定にしようということで…田舎の町にもよくいる、ちょっと迷惑なおばあちゃんという感じでキャラクターを作りました」



ユーノさん「いちばん印象に残った作品は『なめくじ少女』です。あの発想がすごいというか、そして最後のオチの恐怖がすごく強烈でした。あれはどこから来たのかというのをお聞きしたいです」

伊藤さん「『なめくじ少女』はどんな作品かと言うと、主人公の友達が、ある日、ろれつが回らなくなって、とうとう学校に来なくなってしまふんです。家に訪ねて行ってみたら、彼女の舌が“なめくじ”になっていたというものです。それは、私が歯を磨くときなどに鏡を見て、たまに“ペロ”を出して動かしていたら、舌がちょっと“なめくじ”みたいだと思って、もし自分の舌が本当になめくじになったら気持ち悪いだろうなと思って、いつか漫画にしようと思って描きました。主人公が家に訪ねて行って、女の子が玄関口に来て、ペロっと舌を出すシーンがあるんですけど、描いてみていちばん楽しかったというか手応えがありました」



伊藤さん「最後は、お父さんが、娘の舌が“なめくじ”になってしまったので、その“なめくじ”を退治しようと、塩のお風呂に入れるんですけども、舌は縮まないで体が縮んでしまって、少女の顔がまるでカタツムリの殻みたいになってしまったという絵柄が浮かびましたので、そういうラストにしました」



ユーノさん「自分も漫画家志望で、そこにすごく興味があったんですね。生まれたきっかけに。ささいなきっかけで思いついて、そこから飛躍していったんだなと思うと感慨深いです」

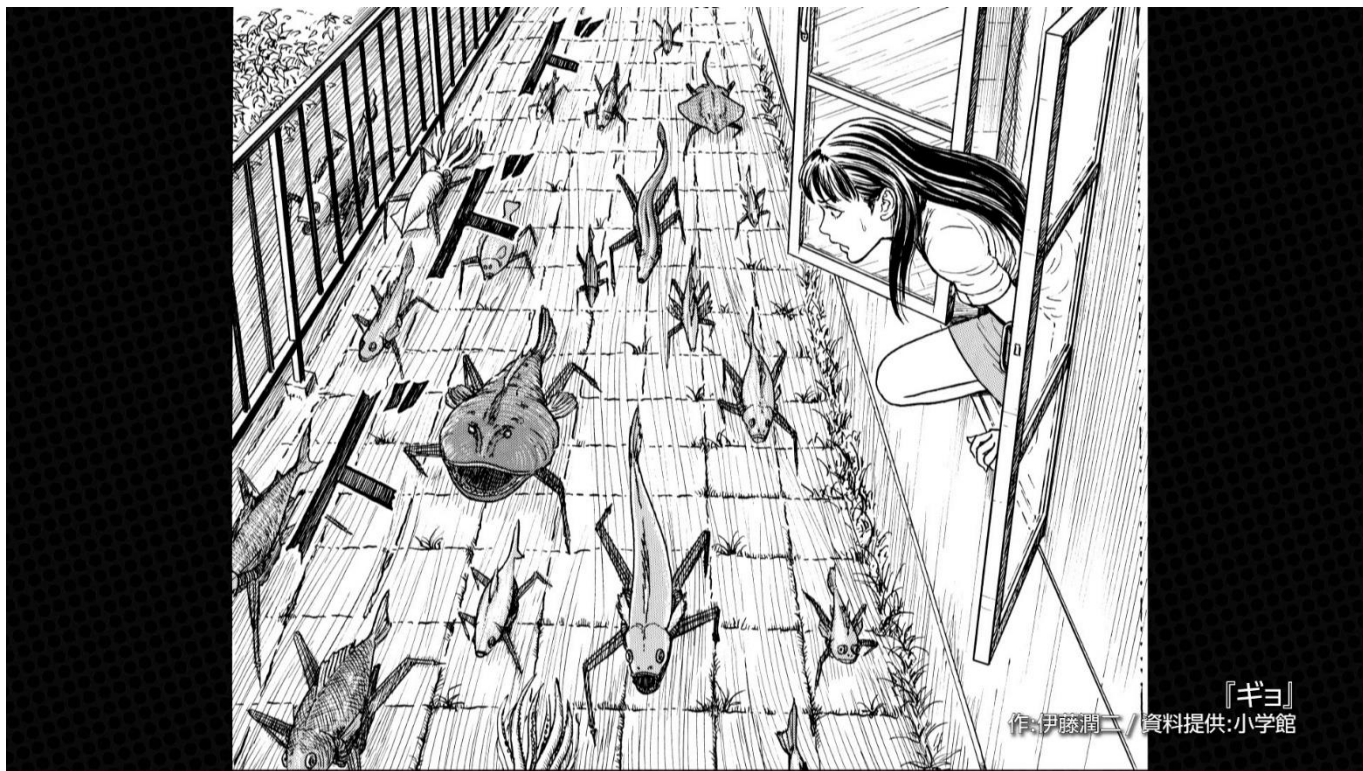
伊藤さん「日常の何気ないところに、ヒントが転がっているということだと思います」

<伊藤潤二流 ホラー漫画術 アイデア作りのコツ>



進行 中川さん「本当にたくさんのアイデアを生み出されてきましたが、アイデアを考える上で大事にされているポイントやコツはありますか？」

伊藤さん「自分なりに分析すると、私の場合、大まかに3つのコツがあるかなと思いました。まず1つ目は、『常識を覆す』ということです。常識の逆を考えるということでもあります。例えば、“吸血鬼”というものを考えると、普通、吸血鬼が他人の血を吸うということで怖いキャラクターなんですけれども、逆に自分の血を他人に吸わせようとする、他人に『自分の血を吸え』と言って襲ってくるという、ちょっと迷惑なキャラクターも面白いかなと思って、昔、描いたことがあります。あと普通、魚は海や川の中を泳いでいるものですが、それが逆に陸に上がってきたら怖いとか・・・」



『ギョ』
作：伊藤潤二 / 資料提供：小学館

伊藤さん「2つ目は、『全く結びつかないものを結びつける』ということです。例えば、『墓標の町』という短編を昔描いたんですけども、墓石と、家の中がくっつくという…要するに、家の中の畳の上にお墓が立っているというイメージが浮かびまして、それはちょっと不思議だなというところから発想しました」



三本の墓標が建っていた

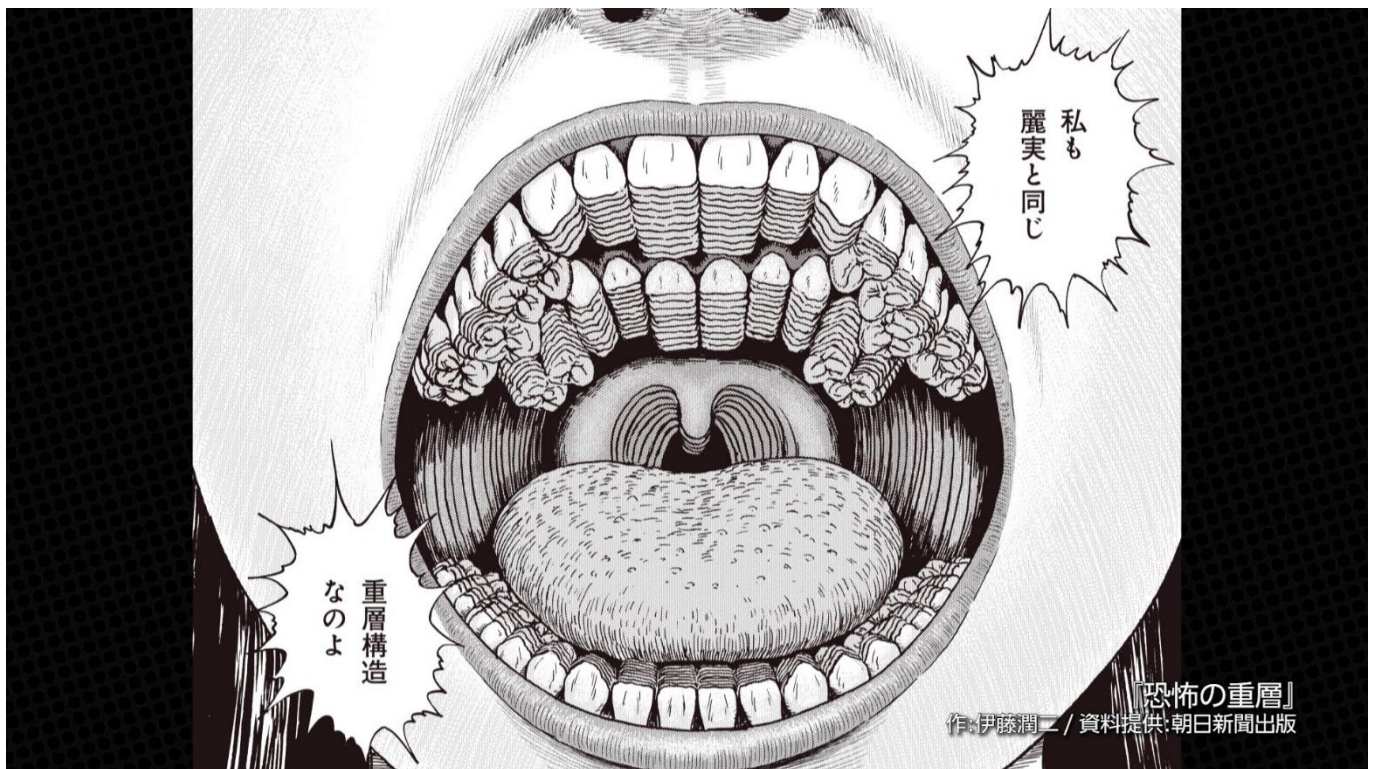
ひっそりとした家の中には親戚にあってた遺書と睡眠薬のペン…そして

『墓標の町』
作：伊藤潤二 / 資料提供：朝日新聞出版

伊藤さん「そして3つ目が、『現実にあるものを利用する』。そういうやり方もあります。私のデビュー作で『富江』という作品がありますけれども、これは、体がちょん切られてもまた体が生えてきて、生き返るとい女性物語なんです。トカゲの尻尾を切ったらまた生えてきたという“再生能力”を利用したものです」



伊藤さん「あと、『恐怖の重層』という話があるんですが、それは貝殻には成長線というものがあって、貝殻をよく見ると細い筋があるんです。成長に従って筋ができていくんですけども、それを人間の体に当てはめて、人間の体が重層的に成長していく、そういったものを考えました。動物の特異な能力や、自然界の構造物を人物に当てはめる。そういうやり方をやってみました」



伊藤さん「ですから、『アイデアの源は身近なところにある』ということが言えると思います。当たり前にあるものを、少し違った角度や疑問を持って接すると、おもしろいアイデアが生まれる。そういうことだと思います」

進行 中川さん「さまざまな角度からアイデアが生まれて、とても興味深いです。貝殻で、どうしてあんなことを思いついてしまうんでしょうかね。一回見ると忘れられないぐらい細かい描写と衝撃、鮮烈。ホラーだけでなく、いろいろなジャンルにおいて役に立ちそうですね、このアイデアのヒント」

<伊藤潤二流 ホラー漫画術 恐怖を紙に焼き付ける方法>



進行 中川さん「伊藤先生の作品の特徴のもう一つとして、『独特の作画』が挙げられると思います。絵を見れば伊藤先生の作品だと一目で分かるほどに特徴的で恐ろしい、だけど美しい作画ですが、恐ろしく描く方法などはありますか」

伊藤さん「私の場合、2つ紹介します。1つ目が、『人体の変形を描く』ということです。人体の変形を描くことによって、読者がその恐怖を我が事のように思う。そういう効果があるのではないかと思います。人体を変形したり、破壊させたりするものは“ボディホラー”と呼ばれているらしいですけれども、私の場合、“ボディホラー”をテーマにした作品が多いです。

私は、動物が変形してもそんなに怖いと思わないんですけれども、人間が変形するとなぜか怖い。複雑な心を宿した人間の体を変形することによって、より理解不能な存在になる。そういった恐ろしさが出る効果があると思います」



伊藤さん「特に、私が“ボディホラー”でうまく描けたなと思うのが、『うずまき』という作品です。これはある町がうずまき模様で汚染されるという変な漫画なんですけれど、その中で主人公の彼氏のお父さんが、桶(おけ)の中でうずまき状にぐるぐるになって死んでしまうというシーンがあります。これも人体の破壊や変形、そういったもののたぐいだと思います。

ここでやっぱり気をつけなければならないのは、人間の体がうずまきのようなになるという、まずあり得ないことなんですけれども、それを『リアルに描く』ことによって、実在感が出るということがあると思います。顔の位置や足の位置、腕の位置、指先、そういったものも素の人体の形を考慮して、こういう形にしてみました。あと、陰影も細かく付けまして、実在感を付けることによって、面白みが出たのかなと思います」

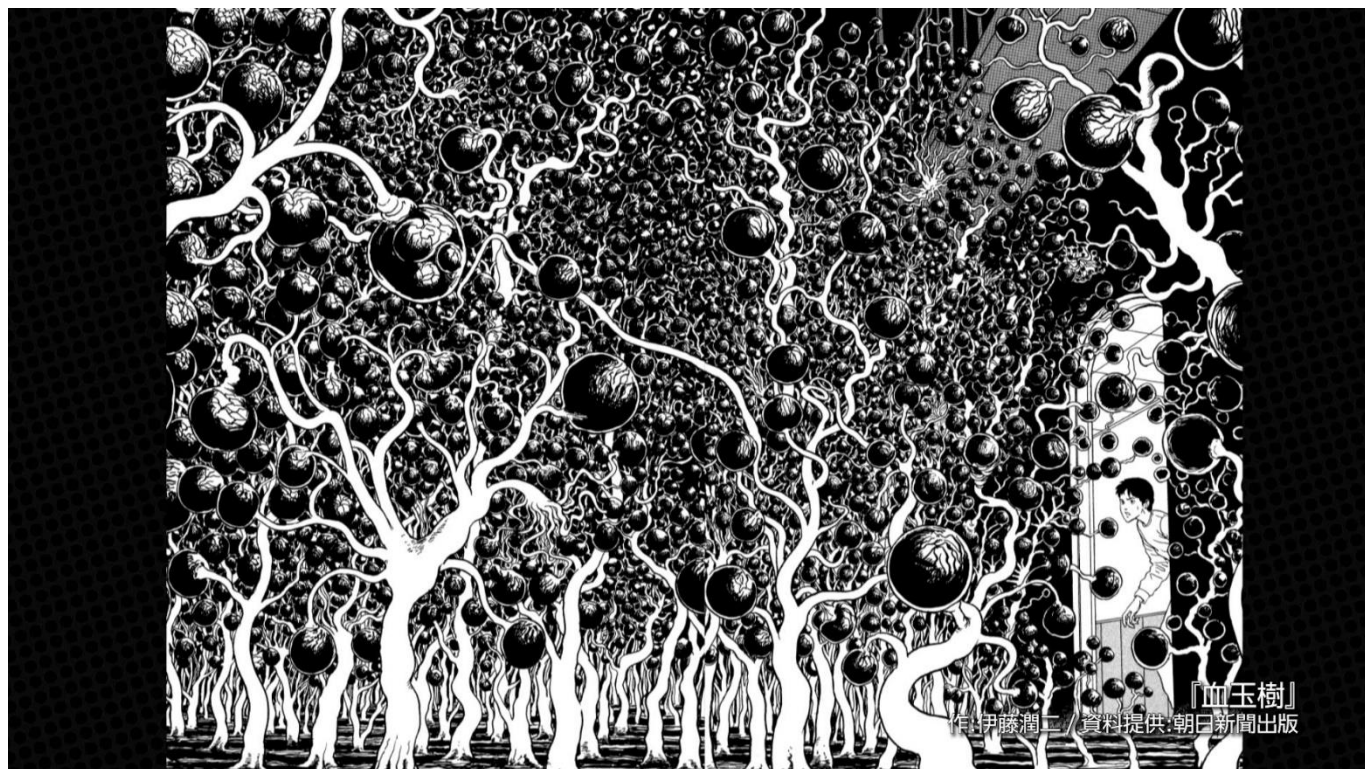


伊藤さん「それから、『恐怖の重層』という話。これは重層構造の呪いというのがありまして、その呪いにかかってしまった少女がまるで貝殻の成長線のように皮膚を重ねていくことによって、16歳になったんですけども、どういうことかと言うと、赤ん坊の頃から皮膚を上を重ねて大人になっていますので、その皮膚を剥いでいくと、その奥の方に2歳の頃の少女の体が今も埋まっているという、ちょっと変な設定なんです。精神に異常をきたしたお母さんが、2歳の頃の娘に会いたくて、この16歳の娘の皮膚を剥ぐんです。そうすると、2歳児の娘が出てくるかと思ったら、ちょっと体がおかしなことになっていた。そういう絵なんです。やっぱり成長すると足や手が伸びますので、それに2歳児の頃の体が引っ張られてしまって、こんなおかしな体になってしまった。その辺もやっぱりあり得ないんですけども、理屈を一応考えて、陰影をつけてリアルにすると、実在感が出て迫力が出るのかなと思います。異形が存在に正確も何もないですけども、読者の方が『自分もこうなったらどうしよう』という不安をかきたてるどころから、より面白みが出るんだと思います」

恐怖を紙に焼き付ける

ペンタッチの多さが おどろおどろしさを生む

伊藤さん「2つ目は、『ペンタッチの多さがおどろおどろしさを生む』ということですね。以前、浦沢直樹先生の「浦沢直樹の漫勉」(Eテレ2017年3月13日放送)という番組に出させていただいたんですけども、そこで浦沢先生から『漫勉に出ていらした歴代の先生方の中で、ペンスピードが最も遅い』というふうに言われました。そして『さささっと書くのではなくて、じわじわと書き進めることによって、おどろおどろしさを生むんだね』というような話をおっしゃっていました。自分ではあまり気がつかなかったんですけども、そうなのかなと思いました」



伊藤さん「じわじわと描いた絵の例ですと、『血玉樹』という作品があります。これは、人の体から植物が生

えてきて、その植物の先に実がなるんですけれども、その実はその人の血液が集まっているんです。その実を、吸血鬼が食べてしまうという話です。田舎の廃村が舞台で、体育館のような広いホールの中に『血玉樹』がたくさんなっているという絵があるんですけれども、ペンでじわじわと描いて、結構いい絵になったかなと思います。その代わりすごく時間がかかりました」



伊藤さん「あとは、『死びとの恋わずらい』という作品があります。いつも霧がかかっているという町が舞台で、霧を描かなくてはならなかったんです。最初は“トーン”(模様や柄が印刷された透明なフィルム画材)を貼って表現するやり方がいちばん霧っぽいかと思ったんですけれども、そこはペンで1本1本、霧を表現してみようということでじわじわと書きまして、独特な霧の雰囲気が出たかなと思います」

進行 中川さん「改めて、すごい密度の線ですね。ひたすら描いていて、やっぱり大変ですか」

伊藤さん「大変と言えば大変ですけども、私的にはそんなに苦ではなくて、霧や植物の線はフリーハンドで描けますので。ささっとではなく、じわじわですけど、気楽に描けますので、そんなに苦労はしないですね、精神的には楽です。むしろ、定規を使ってビルを描く方が大変苦手です。

私は、“余白恐怖症”の気がありまして、漫画を描いていて白く残った部分があると、何か手を抜いているような気がして、ちょっと不安になってきて埋めてしまうという癖が昔ありました。余計にたくさん描き込んで、結果的には暗いホラーな雰囲気を出すことに成功したかなとは思っています」

<Q&A パート①>



伊藤さん「東京都にお住まいのサガエさん、お願いします」



サガエさん「小学生のころから愛読しております。漫画ではないんですけど、私も映画の美術などをしていて、仕事としてホラー映画などもやったりします。職業として漫画家をやっていらして、“締め切り”があると思うんです。あれだけの密度に仕上げるモチベーションをどう保っていらっしゃるのか、すごく気になっておりました」

伊藤さん「モチベーションはやっぱり『この作品は面白くなりそうだ。いい作品を描いてやろう』というところ

ろがひとつありますね。あとは、“締め切り”が私を追い立てる。いやが上にでもモチベーションを上げて締め切りに間に合わせるというところはありますね」



Q モチベーションをどう保つ?

サガエさん「私が携わる映画の場合は自分で完結しているものではないんですけど、仕上がったときに『ああ、もうちょっとこうすれば良かったな』と反省したりするんです。先生はそういったことはありますか？」

伊藤さん「しょっちゅうです。悔いのない作品の方が少ないです。『ああすれば良かった、こうすれば良かった』と終わってから気がつくことも結構ありまして、描いている途中でも、締め切りを考えて妥協することもあります。やっぱり締め切りがある仕事というのは、そういうのはどうしても出てきますよね」

サガエさん「読んでいて、全然そういうことを感じなかったので」

伊藤さん「雑誌掲載時に“白い”場合があるんですね。描き込みが足りなくて白いまま出して、単行本になるときに加筆して、完成度をちょっと上げて単行本にするということはよくやっています」

Q 集中力を高めるには?

NHKACADEMIA



hana

海外

hana さん「伊藤先生の絵を見るとすごいなと思います。集中力を高める方法を教えていただけませんか。私は、集中力がいつも不足しています」

伊藤さん「私も集中力がいつも不足してしまっていて、締め切りが近づくと集中できますね。あとは、仕事場の環境。音楽を流したりして、なるべく集中力が高まるような音楽を流すようにしたり、外の車の音などが非常に私の集中力を削ぎますので、耳栓をしたりします。音楽ですと、昔のジャズが私にとっては集中力を高める音楽になっていますので、よくジャズを流しながらやっています」

Q 一番描くのが大変だったシーンは?

NHKACADEMIA

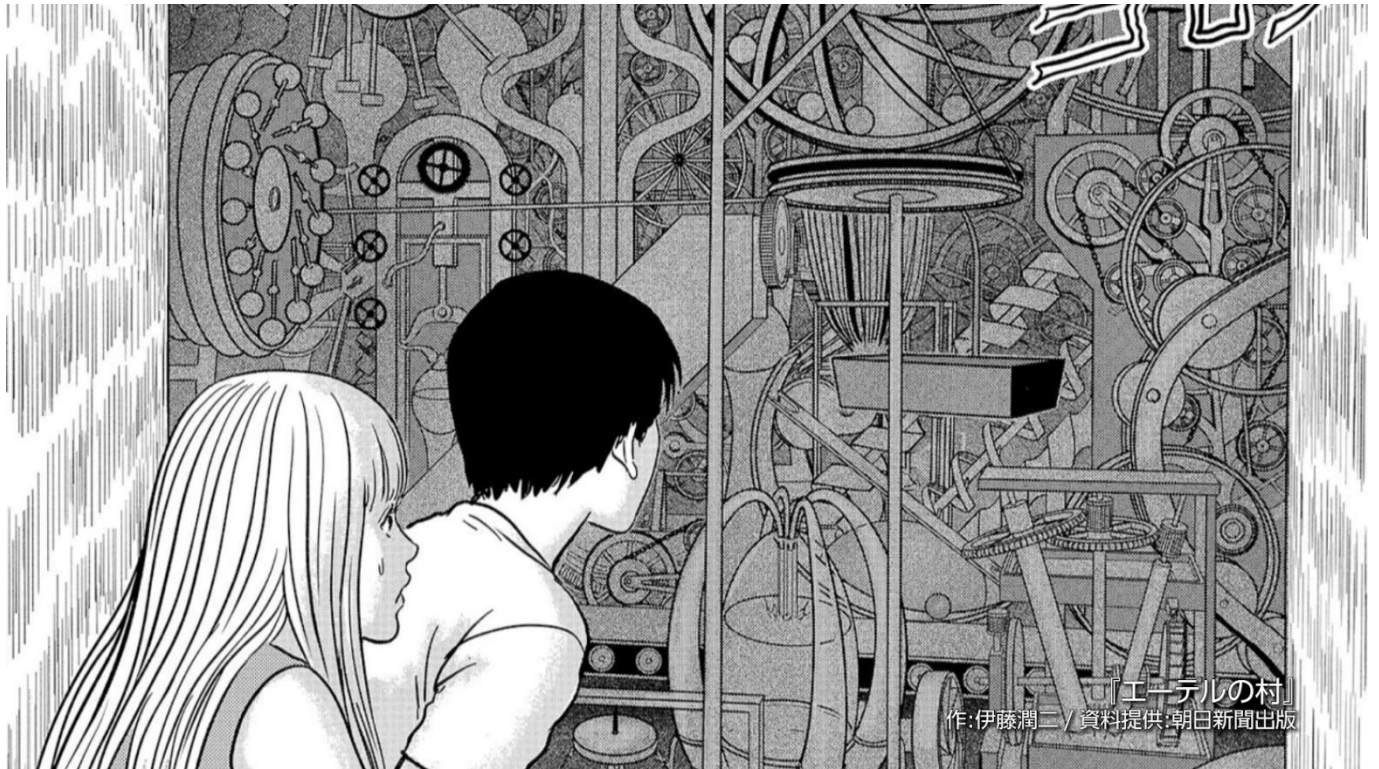


はち

山口

はちさん「伊藤潤二先生の作品は、構成やストーリーなども好きなんですけれど、私は特に絵がすごく好きです。今まで描いてきた中で、いちばん描くのが大変だったシーンを教えていただきたいです」

伊藤さん「例えば、見開きの絵とか一枚丸々1コマの絵とかは、大きい分大変です。過去にいっぱい描いてきたので、そのつど大変だったはずなんですけれど、この歳になるとどのくらい大変だったか忘れてしまっていて、最近のことしか覚えていないんです。最近ですと、『エーテルの村』という永久機関をテーマにした漫画を描きました。工場の中に永久機関がたくさんあるという絵が非常に苦労しました。永久機関なので、その構造を描かなくてはならないので、非常に苦労したのを覚えています」



進行 中川さん「『大変だったことは、どう大変だったか忘れた』という先生。何かさっぱりしていらっしゃって、良いことですよ。絶対大変だったはずですから」

伊藤さん「つらいことは忘れた方がいいかなと・・・」

進行 中川さん「すごい！明るく淡々としている感じ。すごくりスペクトです」

<ホラーとの出会い>

ホラーとの出会い



伊藤さん「私は岐阜県の中津川市というところで、1963年、今から60年前ですけど、その夏の日に生まれました。岐阜県中津川市というところは四方を山に囲まれた盆地で、木曾川も流れていたりして、自然豊かな町です。遊びもたくさんあって、いろんなプールとか路地とか神社とか、そういうところで遊んだ思い出が、漫画にも反映されているかなと思います」



伊藤さん「私の住んでいた家がホラー、“ホラーな家”だったという意味で、やっぱり物心がついたときにホラーを感じた。幽霊を見たとかそういうわけではないんですけども、私の住んでいた家が2軒続きの長屋で、私が生まれた時点で築70年ぐらいたっていたと思うんです。ちょっと傾いていたりしまして、非常に古い家

なので趣があるというか、ちょっと怖いと言えば怖くて…。トイレが裏庭にあって、“ぼっとな便所”なんですけれども、家の地下道を通っていかないとトイレに行けないという非常に恐ろしい家でした。私は、夜は絶対に一人ではトイレには行けなかったですね。そういうホラーな子ども時代でした」



伊藤さん「このシーン(上画像)は、私の古い家をそのまま再現した絵です。こういった地下道を通ってトイレに行っていました。そしてトイレにたどりつく前に、地下の物置がぽっかり口を開けていまして、真っ暗な物置が見えるんです。そこをちょっと小走りで行かないと怖くてしょうがなかった…。いい思い出ではあるんですけどね。ホラーの題材には欠かせないような家でした」



進行 中川さん「ホラー漫画との出会いはいつだったのでしょうか」

伊藤さん「ホラー漫画は、多分4歳ぐらいかなと思うんですけど、私は姉が二人いまして、家で姉が少女漫画を読んでいた中にホラー漫画がありました。それが椋図かずお先生の『ミイラ先生』というホラー漫画だったんです。私の記憶にある中で、それが最初に読んだホラー漫画です」



伊藤さん「ミッション学校なのかな、そこへ通っている女生徒が、ミイラになった先生に襲われる、ミイラが先生に化けているという話なんですけれど、そのミイラのグロテスクな姿が怖いなと思って読んでいたら、次のページで主人公のかわいい女の子が出てきてかわいいなと思ったら、やっぱり次に怖いシーンがあったりして・・・そういう“怖い”と“かわいい”の波状攻撃と言いますか、何とも言えない独特の世界がありました。すっかり私も椋図先生にはまってしまい、ファンになってしまいました」



進行 中川さん「美しい少女がひどい目に遭ったり、気持ち悪い目に遭ったり、“グロテスク”の先に“もっと美しい”が基本的にあって、品があるところがすごく共通しているなど個人的に思っていました」

伊藤さん「本当に榎図先生の影響、そこから私は抜け切れないので、一生ついていこうかなと思います」

進行 中川さん「世界の宝、榎図先生を目指して、また伊藤先生が世界の宝となって、この恐怖そして美しさというものが世界にとどろいていく流れを、ファンとして見られて幸せです」



進行 中川さん「他にも影響を受けたホラー漫画家さんはいらっしゃるんですか？」

伊藤さん「そうですね。椋凶先生とおそらくお年が同じ古賀新一先生。『エコエコアザラク』が有名です。椋凶先生はストーリーの起承転結がはっきりしていて非常に論理的な作風だと思うんですけど、古賀新一先生はどちらかと言うと、感覚的というか雰囲気重視といいますか、独特なペンタッチで怪しい雰囲気を醸し出す、非常に才能を持った先生でした」



伊藤さん「あとは本屋さんで偶然、日野日出志先生の『毒虫小僧』という単行本を見つけまして、私はそのとき初めて日野先生のことを知りました。非常に引かれるものがあったって単行本を買って読んだら、期待にたがわぬ、非常に無気味ですけどちょっとかわいいキャラクターも出てきて、それが残酷な目に遭ったりするんですが、美しいんです。美的にも非常にすばらしい作品で、最後はちょっと泣けてくる話だったりしまして、すっかり日野先生のファンになってしまいました」

ホラーとの出会い

毒虫小僧

日野日出志



『毒虫小僧』

作:日野日出志 / 資料提供:日野プロダクション

伊藤さん「そういった先生方の漫画を読んでいると自分でも何か描きたくなってきました、小学校に上がる少し前に、初めて自分でホラー漫画を描きました(下画像)。全くの遊びで描いていましたので、ペンとインクで漫画を描くなんていうことは全然知らないの、画用紙に鉛筆で描くというようなことをやっていた。目から蛇がニョロッと出ているキャラクターを考えつきました、自分でちょっと映画化したような頭になって、一場面を描いたという絵です」

ホラーとの出会い



伊藤さん「下の画像は、『ゆうれいとさっかく』という、いつ描いたか忘れてしまったものです。錯覚で幽霊を見るというところから展開していったストーリーだと思うんですけど、ススキが手に見えたりして・・・そ

のあとどういう展開だったかちょっと忘れてしまいましたけれども・・・今見ると恥ずかしいような作品です」

ホラーとの出会い



進行 中川さん「小学校で描いたと思えぬ絵のうまさと発想力。すごく続きが気になるページだったんですけども、いつか現在のタッチでリメイクしていただけないでしょうか。当時描いた漫画は、学校で友だちに見せたりされていたんですか」

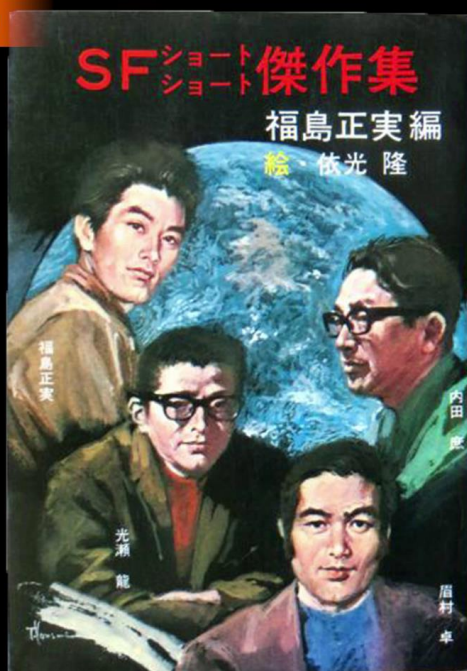
伊藤さん「いや、絶対に見せなかったですね。家族か限られた友達にしか、自分の漫画は見せなかったです。ストーリー漫画ということがあって、それを全ての友だちに見せるというのは、内面をのぞかれているようで非常に恥ずかしくて、漫画を描いているということすら、わずかな限られた友達にしか言わなかったです。結局趣味ということもあって、自分のために漫画を描きたいと思って、そういったモチベーションでそのころは描いていました」

<ホラー以外で影響を受けたもの>

進行 中川さん「ホラー漫画家以外で影響を受けたものはありますか」

伊藤さん「中学時代から、小説の方で日本の作家の『SF ショートショート傑作集』という文庫本がありまして、それを友だちに教えてもらいまして、非常に新鮮な驚きを持って読みました」

ホラー以外で影響を受けたもの



伊藤さん「漫画のときと同じで、自分でもショートショートを書いてみたくなって書き始めました。そのころ、講談社から『星新一ショートショートコンテスト』という、星新一先生が審査員長をされているショートショートの公募がありまして、その第1回に応募したんです。たしか『銀色の雨』というタイトルで、空から銀色の雨が降ってきて、それは水銀だったというオチです。未熟な小説だったので箸にも棒にもかからず、2～3回応募したんですけども、全然ダメでしたね」

進行 中川さん「衝撃的でした。もしかしたら小説家になっていた道もあったかもしれませんね」

伊藤さん「いや、ないと思います(笑)」

進行 中川さん「でも、すごく面白そう。『銀色の雨』。それを漫画でまったりメイクしていただいたりしたいです。確かに先生の作品はホラーだけではなくて、SFっぽいものもあるし、あとコレクションのように短編もたくさんあるので、ショートショート感があるような感じがあります」

伊藤さん「そうですね、だいぶ影響を受けていると思います」

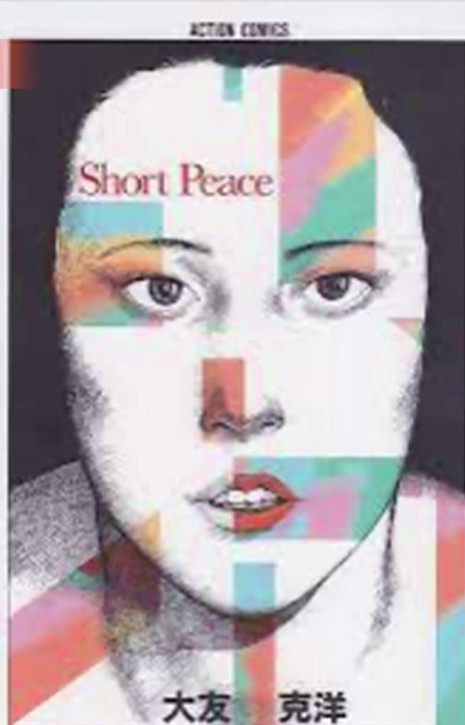
ホラー以外で影響を受けたもの



進行 中川さん「作画はどなたかに影響を受けたのでしょうか」

伊藤さん「高校時代になって、大友克洋先生の『ショートピース』という単行本に出会いました」

ホラー以外で影響を受けたもの



『ショートピース』
作:大友克洋 / 資料提供:双葉社

伊藤さん「それまで漫画というと、手塚治虫先生、ちょっとデフォルメされた漫画という絵。あと、さいとう・たかを先生を代表とする、劇画というジャンルがあって、その2つが主流だったかなと思うんですけども、大友先生の絵はそのどれでもなくて、非常に新しい、新鮮な絵柄だったなという感じで、漫画ですけどアート、非常に芸術的で、線も流麗で、絵柄もリアルで、そういったところは非常に新しかったです。その当時、

“ニューウェーブ”と言って、新しい画風の波をいろんな先生方が受け継いでやっていた」

<歯科技工士 そして 漫画家へ>



伊藤さん「高校時代に漫画を描く友だちに出会ってよく描いていたんですけども、漫画家で食べていけると思わなかったのが、全然そんな方向は考えていなくて、歯科技工士の道を歩み始めました。歯科技工士というのは、入れ歯を作ったり、詰め物を作ったりする仕事なんですけれども、私は非常に彫刻的なことも好きでした。歯について解剖学的に正しい形を学校で習うんですけど、それを彫るのが得意で、自分に向いているなと思っていました。でも実際に歯科技工所に就職して働いてみると、ちょっと思っていたのと違うなど。歯の形をうまく作るに越したことはないんですけども、それより大事なことがあって、それは患者さんの歯にうまく適合するものを作らなければならないし、商売なので、量もこなさなければならない。私は仕事が遅くて、丁寧に作るという聞こえはいいんですけど、ペンスピードと同じで非常に遅かったので、忙しくなると徹夜もありますし、徹夜して帰って寝て、起きたらまた職場へ行って・・・そんなことをして朝食も食べずに出社したりするとどんどん体が痩せてきて、同時に体調も非常に悪くなって、このままだと40歳ぐらいに死ぬだろうなという具合になりました。40歳ぐらいで死んでしまうんだったら、好きな漫画を描いて、漫画家を目指すというのもいいのではないかなと思って、なれるか分からないけれど、漫画家を目指してみようということになりました」



伊藤さん「月刊ハロウィンという雑誌が創刊されて、それは日本初の少女向けホラー専門漫画雑誌という触れ込みで、ホラー好きにはたまらない雑誌でした。創刊号から椋図先生の連載も載ってまして、毎月買っていたんですけども、ある日、『“椋図賞”が創設された』という宣伝が雑誌の中から目に飛び込んできました。椋図先生が審査委員長をやる漫画の新人賞だと言うので、ちょっとこれは描かない手はないと思いました。むしろ『椋図先生に自分の漫画を読んでもらいたい』というのがいちばんの目的となって、1本を描いてみたんです」



伊藤さん「それが『富江』という短編で、これが結果的に佳作をいただきまして、デビューにつながったんで

す。この『富江』というのは非常に美しい美少女なんですけれども、殺されても殺されても何食わぬ顔で生き返ってきて、そういったものが周りを狂わせてしまうという作品です」



伊藤さん「人が死ぬというのはどういうことかという不思議な自分の思いがありました。中学生時代、同級生が交通事故で亡くなって、非常にショックを受けまして、級友が亡くなったという現実感があまりにもなくて、今にも何食わぬ顔で学校にやってきそうな錯覚を覚えたことがあります。そういう不思議な感覚を漫画にしたくて、死んだはずなのに、何食わぬ顔をして学校にやってきた『富江』という、そういうストーリーを作りました。

『富江』が佳作をいただきましたので、早速『次の作品を』という依頼が来まして、紆余曲折(うよきよくせつ)あったんですけど、歯科技工士をやりながらということもあって、3か月に1本ぐらいのペースで“読み切り”を連載させてもらいました。3か月に1本ぐらいのペースで、二足のわらじで描いていたんですけども、それでもやっぱりさすがにしんどくなってきてまして、技工士を辞めて、漫画家1本になりました」



進行 中川さん「漫画家になられてから、いちばん大変なことは何ですか」

伊藤さん「どの漫画家さんもそうだと思うんですけど、“締め切り”ですね。締め切りが苦しみを生んでいるというか、締め切りに追われて生活しているという感じです。今はちょっとペースが落ちたかなと思うんですけど、昔は月刊誌に連載していますと、ひと月に1本書いていました。ひと月の中で、ストーリーを考えて作画をして完成させるということをやっていますと、私の場合、半分半分でやっていますと、前半15日でストーリーを作って、ネームを書いて、後半で原稿、作画に移るというやり方をしています。やっぱりそれはギリギリで、ちょっと作画の時間が足りなくて、白のまま出してしまうというようなことが多かったんですけど、そんなような感じで毎月毎月仕事をしていました。でも『漫画を描く』というのは非常に楽しいことなので、やりがいがあるというか、読者の反応もありますし、楽しいからやってこられたかなと思います」

進行 中川さん「先生の作品は短編がとても多いんですけども、それにも何か理由があるんでしょうか」

伊藤さん「もともとホームグラウンドにしていた月刊誌で描いていたのが、“読み切り”というのが多くて、歯科技工士を辞めてからも“読み切り”の短編を描くという連載をやりました。編集さんが私の短編が面白いなと思ってくれたんだと思うんですけども、短編の連載をしようというふうに話をくださいました。後に長編を描くようになって、長編の難しさに非常に悩んだというのがあります。長編というのは先が長いので、その時点でどの選択肢を選んでいいのか迷ってしまってなかなか先に進めないということがあるんです。その点、短編は先の計算がしやすく、一つのテーマ、怖い対象を徐々に盛り上げて恐怖が最高潮に達したところで終わる。そういうやり方をすると、“恐怖の純度”を保ちやすいという意味で、ホラーは短編が向いているのかなという思いもあります。

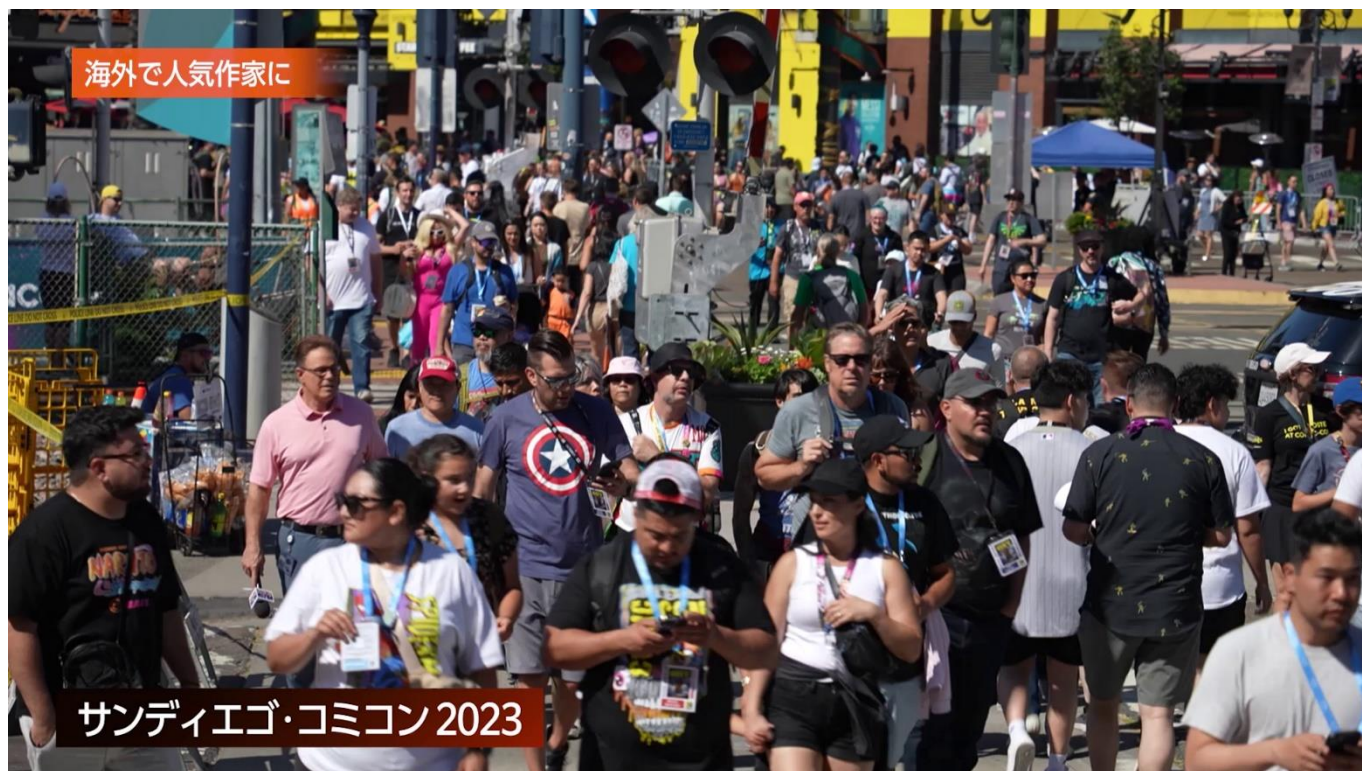
私あまりキャラクター描写に興味がないというか、むしろ物語の中の不可解な現象を描くことの方に興味がありますので、そういう点でもやっぱり純度の高い不可解な現象が短編に向いているということがあって、短編の方が得意かと思います」

<海外で人気作家に>



進行 中川さん「伊藤先生は漫画界のアカデミー賞とも呼ばれる『アイズナー賞』を、4度も受賞されているとのことで、海外でも高く評価されています。このアイズナー賞を受賞されたときは、どんなお気持ちでしたか」

伊藤さん「デビューした頃は、日本の読者の方に読んでもらうだけでもすごいことだったので、海外の人に読んでいただいて、しかも賞をいただいってしまうというのは本当に信じられなかったです。もらっているのかなという感じでした」



※映像（開始点 57 分 22 秒）とあわせてご覧ください。

進行 中川さん「最近では、海外のイベントにもよくご出演されているとのことですよ」

伊藤さん「こちら(上の映像)は、カリフォルニア州サンディエゴ。5 日間にわたって、『コミコン』が開催されました。『コミコン』というのは、いわば“オタクの祭典”のようなもので、多いときだと 13 万人以上の来場者が訪れる大きなイベントです」

伊藤さん「これはサイン会の場面ですね。おのこの好きなグッズにサインしました。現地のファンの方と近距離で接して、その熱気を直接感じることができました」

伊藤さん「これは講演会の様子です。1000 人近くの方が来てくださったとのことですよ。中には、私の作品のコスプレをしてくれる人もいました。『うずまき』の黒谷あざみ、それから『富江』、『双一』などもいました」

伊藤さん「また、日本の漫画を翻訳しているビズメディアのブースでは、『ITO-VERSE』という名前で、大きなパネルや原画の展示を行っていただきました。『コミコン』の期間中には、原画展などもありました」

来場者①「とても小さなキャンバスの中に、リアルで細かな表現をするのがすごい」

来場者②「自分の頭の中にある一番ダークな部分、それを描いてくれるのがイトウ先生なんだ。だからこそ、私は彼のファンだ」

来場者③「とてもユニークだ。他の人とは全く違う線の描き方が、いちばん気に入っている。彼の作画の才能には驚かされるよ」

海外で人気作家に



進行 中川さん「現地の方の興奮ぶり、素晴らしいですね！『双一』のコスプレの方、本物すぎる！すごい。歯はどうやったんだろう！？いやあ、素晴らしいですね」

伊藤さん「そうですね、本当にうれしいですよ。やっぱり海外で受け入れられているというのは、私の絵が“リアル寄り”なので、ビジュアルのイメージが、“言語の壁”を越えて通じてくれているのかなと思います」

<ジャンルの垣根を越える 新たなホラー>

進行 中川さん「続いては、これからの伊藤先生についてです。『人間失格』や、私の大好きな『よん&むー』など、ホラー以外の漫画にも挑戦されていますが、きっかけは何だったのでしょうか」

伊藤さん「デビューして10年ぐらいは、月刊ハロウィン、そこだけでやっていたんですけども、そのあと月刊ハロウィンが休刊になりまして、他社でも仕事をするようになりました。青年から大人が読者層という雑誌もあったりして、そういうところで描く場合には、やっぱり少女漫画風の作風ではないものを描かなければというのがあって、ちょっと違う作風を目指したりしました」



伊藤さん「例えば『人間失格』なんていうのが、非常にやりがいがありました。『人間失格』というのはもちろん、あの太宰治原作の『人間失格』なんですけれども、私は実は読んでことがなくて、編集さんから話を振られて初めて読んだんです。大庭葉蔵という若い主人公がいるんですけど、恐らく太宰治自身がモデルだと思うんです。読んでみると、自分と共通点がたくさんあって、非常にシンパシーを感じてしまいました。一点、違う点があるとすると、大庭葉蔵は非常に女性にもてるというところがあって、そこは私と全然違っていました。

例えば、自意識過剰で人の目を気にしているところや、学生時代の^{大庭葉蔵}は非常に勉強ができるんですけども、それをカモフラージュするために“道化”を演じて、優秀なんだけれど優秀ではない“ふり”をしているところ。私も特に専門学校時代は、ちょっと“ふり”をしまして・・・それは大庭葉蔵と逆で、本当は勉強ができないのにできるふりをしていたという、非常に苦しい学生時代でした。そういうシンパシーを非常に感じましたので、これは自分としても描いてみたいなということで描きました」



伊藤さん「やっぱりホラーを描いてきたものとしては、読者の方も、多分ホラー的要素を期待しているんだろうなというのがありまして、『人間失格』の中に幽霊を登場させたり、非常に勝手なことをしてしまって、編集さんはハラハラしていたようです。結果的に、私らしい『人間失格』が描けたのではないかと思います」



ジャンルの垣根を越える 新たなホラー

進行 中川さん「そして『よん&むー』。猫絵日記でありながら、ものすごくホラータッチな表現だったり、本当によんちゃんは悪魔のような柄があったり、かわいいですね。ホラーを描いている伊藤先生が、こんなにかわいい猫漫画を！ だけど猫を飼っている人にしか分からない『あるある』という瞬間、写真でも写らないような瞬間が絵に切り取られていて、先生の深い猫愛も感じてびっくりしたんですけど、これはどういうふうに

生まれたんでしょか」



伊藤さん「私は結婚するまで猫を飼ったことがなくて、猫と言うと、道を歩いていると塀の上からにらんできて、「にゃあ」と鳴くというちょっと不気味なイメージを勝手に持っていたんです。結婚するときに家内が猫を飼っていて、それを連れてきたので、一緒に生活することになりました。初めて飼いましたので、猫のいろんな面白いエピソードがたくさんありまして・・・脱走したり、魚を狙ってきたり、そういったことがありましたので、いずれエッセイ漫画として描きたいなと思っていたんです。そんなことを思っていたら、タイミングよく、ある編集さんからお話をいただいたんです。その編集さんは、私が双一シリーズの中で猫を登場させたんですけれども、『どうも伊藤さんは猫を飼い始めたらしい』というのを察して私に連絡をくれまして、『本当に猫を飼っています』という話になって描くことになりました」



伊藤さん「ホラータッチというのは、編集さんの要望でもありましたけれど、私としてもそういうふうに描きたいなと思っていましたので、ホラータッチのギャグ、前例がないわけではないんですけども、ちょっと新しい感じのものができると、結構楽しく描きました」

進行 中川さん「かわいいのに怖かったりする面白さで、またギャグとしてすごく独特になっていて、何十回読んでも毎回面白いし、会う人会う人にめちゃくちゃ薦めまくっています。別のジャンルを描かれても、伊藤先生らしさやホラー要素が含まれてくるというのが、すごく面白いし楽しみになります」

伊藤さん「ありがとうございます」



進行 中川さん「先生は、現在絵本にも挑戦されているとのことですが、詳しく教えていただけますか」

伊藤さん「『怪談絵本』というシリーズがありまして、ホラーな絵本の作画を今回担当しました。過去にも怪談絵本シリーズで非常に怖い絵本がたくさん出ていまして、私もちょっと仲間入りさせてもらって、ついこの間仕上げました」



※映像（開始点 1 時間 08 分 14 秒）とあわせてご覧ください。

伊藤さん「怪談絵本の作画、今回は油絵で描こうと思って、油絵を採用しました」

伊藤さん「これ(上の映像)は下書きの状態から、色をつける作業をしているところです。油絵を描いたのは、高校時代に美術部だったので、そのとき以来というか、漫画家になってからは時々、単行本のカバーの絵を油絵で描いたりした程度で、最近はほとんど描いていなかったのが、久しぶりに挑戦しました。透明水彩でふだんは描いているんですけども、水彩だとなかなか修正が難しいんです。油絵ですと上に重ねることができますので、修正もしやすいかなと思って油絵にしました。でも、なかなか油絵も時間がかかって大変でしたね。余裕を持って制作期間を半年いただいたんですけども、結局3か月ぐらい延ばしてもらった結果になってしまいました」



伊藤さん「これは絵本の中のワンシーンですけど、わりとイメージに近いものができたかなと思います。ちょっと単調な構図になってしまって、反省点もあるかなという仕上がりです。

『こっちをみる。』というタイトルの絵本で、怪談絵本コンテストで大賞を取った作品で、となりそうしちさんの原作です。これは、少年の身の回りにどんどん顔が見えてくるというストーリーなんですけれども、その顔が自分をずっと見ているという話です。私も若い頃、視線恐怖症で他人の視線が怖かったんですね。見られる怖さというのは痛いほどわかりますので、私も作画にちょっと力が入りました」



ジャンルの垣根を越える 新たなホラー

ホラー×絵本

進行 中川さん「漫画の作業をされている合間に、油絵も描かれていたなんてびっくりです。しかし、油絵の中でも見たことがない、いろんな色とそしてアナログで！デジタルで作画されることも多いとされる中で、油絵は何百年も残るという意味で、時間がかかっても、とてもありがたいです。この重厚感、オーラがすごいですね。油絵とふだんの漫画との技法的な表現の違いなどはかなりあるんですか」

伊藤さん「油絵は、絵の具自体が不透明なものが多いので、例えば下の絵で失敗した部分を、上から重ねて覆い隠したりできますので、そういう点でも有利ですね。例えばアクリル絵の具と比べて、顔料自体の重厚感というか深みがやっぱりあるかなと思います。漫画はペンとインクで白い紙に白黒で書きますので、重厚感の違いはあるのかなと思います」

進行 中川さん「絵本に挑戦されてみていかがでしたか」

伊藤さん「絵本はもともと描いてみたかったので挑戦したんですけれども、想像以上に大変な作業でした。サイズも大きいですし、これを16~17枚描いたら、非常に大変な作業でした。これを日頃やってらっしゃる絵本作家の方々には敬意を抱きました」

<なぜ ホラーを描くのか>

進行 中川さん「ここまでさまざまなお話を聞いてきました。結局のところ伊藤先生は、なぜホラー漫画を描くのでしょうか」

伊藤さん「子どもの頃からいつも“非日常”を求めていたかなと思います。幽霊を見たいけれど、出なかった。あと、空飛ぶ円盤も大好きで、いつも空を見て探したりしていたんです。日常がちょっと退屈だなという思いから、ホラーという非日常を、漫画の中で表現したいということもありました。あと、ホラー漫画は本当に幼

い頃から親しんできましたので、それを描くということが、私にとって心の安定につながっているというのがあります。怪異現象や幽霊などに出会ってみたいという気持ちがありまして、そういう気持ちが、自分の中で空想力を引き起こして、漫画を描く活力になっているのかなと思います」

進行 中川さん「これからも面白いホラー漫画をたくさん描かれることを心待ちにしております」

<Q&A パート②>



るうさん「歯科技工士を最初は目指されていたという話なんですけれど、自分の目指す方向を変えるというのはとても勇気がいることだと思います。それは怖くなかったですか」

伊藤さん「私も結構、石橋をたたいて渡る方で、無謀なことは怖くてできないんですけど、漫画家になるのを決めた頃というのは、本当に歯科技工士の仕事も忙しくてどんどん痩せて体調も悪くなって、あと20年ぐらいで死ぬだろうと思っていたんですね。『どうせ死んじゃうんだったら、そんなに先のことを心配しなくてもいいや』と思って、清水の舞台から飛び降りるといのかですね…。体調が悪かったというのが、ふだんはそういうむちゃなことをしない自分がむちゃなことをしたきっかけでした」

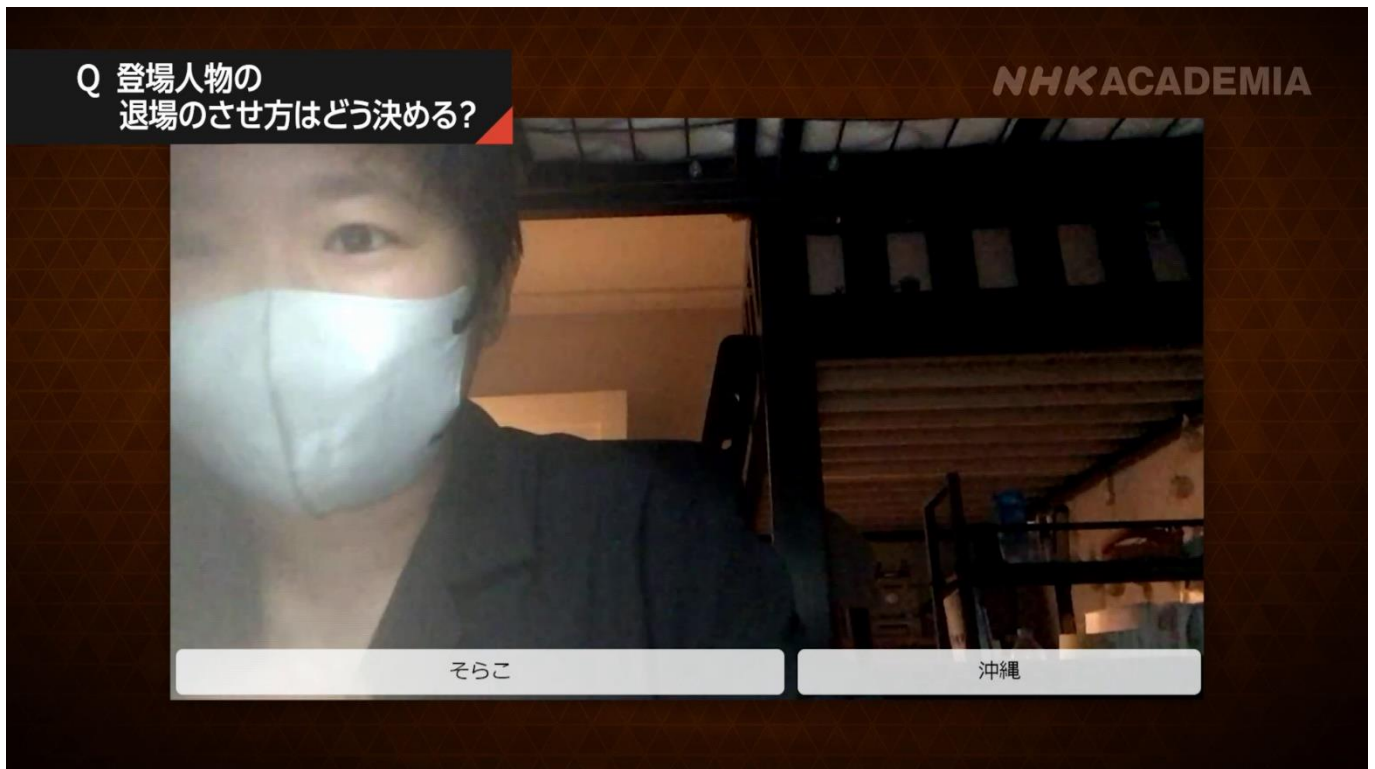
るうさん「自分の進む道を、今、決定しなければいけない立場にあるので、できれば応援コメントをいただけるとうれしいです」

伊藤さん「大学進学される予定なんですか？私は大学に行っていないので、こんなことを言うのもなんですけれど、やっぱり大学に進学してより高いレベルの勉強をするというのは、これからの人生において有益なことだと思います。どんな道に進むにしても、大学でいろいろと勉強するというのは貴重なことだと思います。人生長いので、その中のごくわずかな時間に、そういった勉強に集中するのは非常に有意義なことだと思います」

ので、ぜひ進学していろんなことを学んでいただきたいなと思います」

るうさん「がんばります。ありがとうございます」

進行 中川さん「『富江』のようにかわいらしい。先生からじきじきに背中を押すコメントをいただいて。先生のように、人生の中で何気ないことが意外なアイデアだったり、衝撃的な何かだったりに変わるかもしれないと思うと、るうさんの未来が楽しみです」



そらこさん「『うずまき』のねじれた人々や、『ギョ』の主人公が、先生にしては珍しくすごくきれいに終わっているなど感じて疑問に思ったんですけど、物語の登場人物を退場させるときに、こいつは気持ち悪い死にざままで描こうとか、この人はきれいに退場させようとか、そういう価値基準はありますか」

伊藤さん「私の場合、キャラクター主体で描いていなくて、まず『この不思議な現象を描きたい』というところからストーリーを組み立てて、キャラクターをそれに沿って動かすということをやっていますので、結果的にストーリー上そうなることはありますけれども、このキャラクターをこう生かそうとか、ひどい目に遭わせようとか、そういうふうには考えていません。結果的にストーリー上そうなったということがほとんどです」

Q 作品をつくるときに
最初に考えることは?

NHKACADEMIA



日野さん「アイデアが浮かんだあとなんですけれど、1本の作品にするのに、何を最初に考えて組み立てているのかを聞きたいです」

伊藤さん「私は短編が多いので短編の場合ですと、最初に基本になるアイデアというものがあります。いろんなシチュエーションだったり、おぼろげな雰囲気だったり・・・自分の中で感じる違和感のようなものをちょっと漫画にしてみたいなというおぼろげなところもあります。逆に、明確なビジュアルで思いついたアイデアもあります。ストーリーを組み立てる上で、そのアイデアを最も効果的に生かせるストーリー作りをするように心がけています。ちょっと抽象的ですけど、どういうストーリーの組み立て方をすれば、最初のアイデアが最も効果的に生きてくるかというのを、まず大事にしています」

Q ホラー漫画以外で描くとしたら?

NHKACADEMIA



ミズシさん「僕は『よん&むー』で伊藤先生を知りまして、すごく面白いなと思ったんですけど、もし仮にホラー漫画以外で何か別のジャンルで漫画を描くとなったら、どういうジャンルの漫画を描いてみたいと思いますか」

伊藤さん「これは結構冗談交じりでよく言うんですけど、“春風がそよぐような青春ラブコメ”を描いてみたいという気持ちが、冗談めかしている割には本気で思っているんですけど…。昔、例えば、高橋留美子先生やあだち充先生のラブコメ漫画に非常に気持ちが高揚しましたので、そういった爽やかな気持ちになる漫画を描いてみたいというのはちょっとあります」

ミズシさん「めちゃめちゃ面白そうなので、ぜひよろしくお願いします。ありがとうございます。期待しております」

進行 中川さん「“青春ラブコメ”。すごく読んでみたいけれど、ページをめくったら何か起きちゃいそうな…ドキドキします」



にいがちゃくんさん「先生の作品はリアルなところもありまして、実写映画化されているものもあるかと思います。今後、実写化してみたいと思う作品があったら教えてください。あと、今回ナビゲーターで中川翔子さんがいらっしゃいますが、もし中川さんが出演されるとしたらどの作品がいいか、聞いてみたいと思います」

伊藤さん「実写化・・・私の個人的な希望ですと、短編で、『阿彌殻断層の怪』という山岳地方に地震で大きな断層ができて、その断層に人の形をしたトンネルがいっぱいできているという話があるんですけども、それをちょっと実写で見たいなということがあります。

それから、中川翔子さんを私の原作に・・・おこがましいんですけど、もし出ていただくとしたら『地獄星レミナ』のレミナ役でぜひお願いしたいなと。漫画の中でもアイドルタレントという設定ですので、ピッタリじゃないかなと思います」

進行 中川さん「ものすごく恐れ多いんですけど、『地獄星レミナ』が大好きなので、ゴリゴリにいろんなCGを駆使して、みんなに襲われたいなって思います。それがかなうよう妄想して生きていきたいと思います。ありがとうございます」



今日はたくさんの読者の皆さんと直接お話ができて、こういう機会は滅多にないので、非常に有意義なひとときでした。つたない講義でしたけれども、皆さんの何かお役に立てば幸いです。本当に今日はありがとうございました。